経済Ⅱ（丸山）　シケプリ

マルクスの「資本論」についての授業です。授業の概略を「面白いほどよくわかる資本論」（監修：土肥誠）と「高校生からわかる『資本論』」（著：池上彰）の2冊を使って解説していく方向でシケプリつくります。（授業のスライドにはあまり準拠しておりませんのでご了承ください、ただ、８割はカバーしたつもりです。）これはあくまで用語の理解補助のための冗長な説明にすぎませんので、ネット上に神シケプリあるのでテスト前はそっちメインで勉強してください。

序．なぜ今「資本論」なのか？

今世界経済は行き詰っています。非正規社員の数が増えて派遣社員とよばれる不安定な雇用形態で働く人の数が増えています。

マルクスが「資本論」を書いた時代、産業革命が進み大規模工場ができ、労働者は馬車馬のように働かされていました。そのような現状をマルクスは「資本論」で分析、批判しました。そして彼の理論に共鳴した人々がソ連を始め社会主義国家を建設しましたが、結局うまくいきませんでした。

そして現在社会主義の国はほとんどなくなり、資本主義の国家ばかりになっています。しかし社会主義に勝利した資本主義も行き詰まりを見せ、リーマン・ショックなどの世界的恐慌に人々は悩まされ、再び労働者がモノのように切り捨てられています。つまるところ、マルクスが批判した昔の資本主義社会へ先祖がえりしてしまったわけです。

そこで、今の資本主義社会を知るためには「資本論」を読み直すことが一つの方法であるというわけです。“実際「資本論」を今あらためて読み直すと「**140年前のことを書いたのに、まるで今のことをいっているようだ**」ということがいろんなところにでてきます”（池上談）。

今「資本論」が学べる場所は非常に限られているそうですから、丸山先生の授業をとれた私達はとてもラッキーなようです（白目）。

それでは「資本論」を読んで、現在の資本主義社会の問題点を探っていきましょう！

と、いいたいところですがその前に。池上氏による素晴らしい資本論の要約を読んでからにしましょう。

**資本論（要約）**

*“人間の労働があらゆる富の源泉であり、資本家は、労働力を買い入れて労働者を働かせ、新たな価値が付加された商品を販売することによって利益を上げ、資本を拡大する。資本家の激しい競争による無秩序な生産は恐慌を引き起こし、労働者は生活が困窮する。労働者は大工場で働くことにより、他人との団結の仕方を学び、組織的な行動力を獲得し、やがて革命を起こして資本主義を転覆させる。”*（一部改変）

１．「商品」の分析から世の中を理解しよう

ではマルクスの最初の有名な文章から。

「**資本制生産様式が君臨する社会では、社会の富は「巨大な商品の集合体」の姿をとって現れ、ひとつひとつの商品はその富の要素形態として現れる。したがってわれわれの研究は商品の分析から始まる。**」

要するに世の中にあふれている「商品」を分析すれば世の中の仕組みがわかる、ということです。

では、「商品」とは何か？

マルクスは、「商品」とは「使用価値」と「交換価値」の二つをもっている、と言っています。

では「使用価値」と「交換価値」とは何か？　「資本論」から引用すると、

「**人間生活にとって一つの物が有用であるとき、その物は使用価値になる。（中略）われわれが考察する社会形態では、使用価値は同時にまた、もう一つ別の物の素材的な担い手になっている。それがすなわち交換価値である。**」

つまり、使って役に立つもの、マルクスの言葉を借りると「人間の何らかの欲望を充足させる一つの外的対象」、たとえば食欲を満たしてくれるパンやカレーは使用価値をもっているから、「商品」であるといえます。

しかしここで大事なことは、モノが商品であるためにはその使用価値が「他人の欲望を充足させる」ものでなくてはならないことです。つまり、自分でパンをつくって食べてもそのパンは「商品」ではないということです。

　　そして商品がもつもう一つの価値が「交換価値」。すなわち、互いに使用価値を持つ者同士は交換できる価値を持つということです。そしてその交換は異種の商品間でも可能です。例えば米1合と鉄100グラムといったように、使用価値の種類、充足する欲望が異なっても交換は可能です。こうして、「商品」は「リンゴ10個＝豚小間1キロ＝鉄100グラム＝いす1脚…」といった風にイコールで結ぶことができます。マルクスの言葉を借りれば、「すべての商品は量的比率によって表される」のです。

　　では、全く異なる数々の商品をイコールでつなげるのはなぜなのでしょうか。マルクスは、ここに「ある内実」が潜んでいるとしました。

そこでマルクスが提案した、異なる使用価値をはかる共通のモノサシは「人間の労働力」です。具体的に言うと、「社会的に必要な労働時間（社会的平均労働時間）」が交換価値の式の背後に潜んでいるとしたのです。マルクスは資本論でこのことを「**使用価値または財は、抽象的かつ人間的な労働がその中に対象化されている、あるいは受肉しているからこそ価値をもつ。**」と表現しています。

このような学説を「労働価値説」といいます。このことを大前提として、マルクスは議論を進めていきます。また、マルクスは労働には使用価値を作る労働としての「具体的有用労働」、価値を作る労働としての「抽象的人間労働」の二つの側面があるとしています。これも頭に入れといてください。

２．４つの価値形態

　　“この節は「資本論」でもっとも難解とされているところです”（土肥談）。

　　商品交換の仕組みから貨幣の誕生の必然性を説明しています。商品が４つの価値形態をとる、と仮定することで貨幣の誕生を論理づけているわけです。では４つの価値形態について見ていきます。

　　「資本論」の例に即して解説します。

　　誰かがリネン（亜麻布）20エレ（エレは布地の尺度）を手放して上着1着と交換しようとするとき、リネンと上着1着は等価となります。すなわち、リネン所有者が使用価値としての上着1着を選択して、リネン20エレの価値を表現しているのです。ここでは一方の使用価値が、もう一方の価値を測ることになります。このように、価値を測るための商品を「等価形態」といい、自らをほかの商品によって測られる商品を「相対的価値形態」といいます。この例ではリネンは「相対的価値形態」、上着が「価値形態」をとります。

・拡大例

リネン20エレ＝1着の上着

＝10ポンドの紅茶

＝1クォーターの小麦

＝２オンスの金

＝5キロの鉄

＝……und so weiter.

上の拡大例において、リネンは右辺の様々な商品の等価形態となっています。このように、一般的に現れ　　る価値形態を「一般的価値形態」（リネンそのものは「一般的等価物」）といいます。今回の例ではリネンでしたが、どの商品も、だれにとっても使用価値のある、共通のモノサシとなれる資格をもっています。その中で、歴史のなかでその役割を担うようになっていったのが「金」「銀」といった貴金属でした。これが４つめの形態である「貨幣形態」です。

この貨幣の誕生について、マルクスは「**商品は、その使用価値の雑多な実物形態と著しい対照をなす共通の価値形態、つまり貨幣形態をもつということである。（中略）この優越的な地位を一つの特定の商品が歴史の中で獲得した。それが金である。金・銀は生まれつき貨幣であるのではないが、貨幣は生まれつき金・銀である。**」と書いています。

☆ここまでのまとめ

商品というのは使用価値と交換価値の二つをもっている。様々なものが使用価値をイコールで結ばれ、交換できる。ここで異種なものがイコールで結ばれるのはすべての「価値」は労働力によってうみだされるからである。交換を続けるうちに人間は金が交換に１番便利なことに気づき、金が貨幣になった。

３．物神的性格

「物神的性格」はマルクスの資本主義批判における重要な基本概念のひとつです。マルクスは商品を分析したあと、資本主義における商品の表れ方を考察しています。

個々の人間が作った商品は、市場に出されることで、その人がどうやって作ったかという事実は消えます。つまり、前述した「具体的有用労働」は市場では問題にならず、「抽象的人間労働」のみがその価値を表すために問題となります。しかし、その商品をいくら眺めても、個々の人間の「具体的有用労働」は見えてこず、逆に商品には、あたかも労働とは無関係に初めから価値が内在しているように見えてしまうのです。そしてもともと人間の生産物であったはずの商品や貨幣が逆に人間を支配する力（物神的性格）をもち、結局は人間同士の関係が物の関係におきかえられ、人間の労働の社会的性格が市場における価値関係におきかえられてしまうのが今の資本主義社会だとマルクスは指摘しています。

そしてさらにマルクスは今の資本主義社会は普遍的な社会ではなく、特殊歴史的な社会であると考察しています。

始め、人間は共同体の中で自給自足生活をし、「商品」という概念をもっていませんでした。（なぜなら自分で作って自分で消費するものは「商品」ではないからです）しかし社会の発展と共に共同体内で余剰生産物が発生し、他の共同体の生産物との交換を求めるようになりました。そして「市場」がうまれ、商品交換が始まりました。どの時点で商品が発生するのかについて、マルクスは**「共同体が他の共同体またはほかの共同体の成員と接触する点**」という有名な言葉を残しています。そして「商品」がうまれ、今の資本主義社会を形作っていったわけです。しかしマルクスは、未来社会は「**共同的生活手段で労働し、自分たちの多くの個人的労働力を自覚的に１つの社会的労働力として支出する自由な人々の連合体**」としての共産主義社会になると予想しています。ですから、商品が物神的性格をもつ今の資本主義社会は、自給自足時代と共産主義時代に挟まれた、人類にとっては特殊な歴史である、といっているのです。

４．貨幣についての考察

貨幣が価値のモノサシたりうることは皆さん理解していると思いますが、モノサシには目盛が必要です。目盛の単位は最初、貨幣に使われる金属の重量で決められました。例えば、イギリスのポンドは１ポンドの銀で作った銀貨＝１ポンド銀貨というところからきています。しかし時代と共に金属の重量単位から貨幣単位は切り離されていきます。その理由についてマルクスは「外貨の流入」「より高品位な金属貨幣の登場」「権力者による改鋳」の３つを挙げています。イギリスは２番目の例で、金貨が導入され1ポンドの価値を持つ金の重さが1/15ポンドとなったところから重量単位と貨幣単位の乖離は始まりました。

また、商品の価格＝価値ではありません。価格は需要と供給の関係で常に変動しますが、労働量である価値は一定です。したがって貨幣によって商品が共通の価値を持つように見えても、貨幣は尺度に過ぎず、実際には労働によって等価になっているのです。このことをマルクスは「**貨幣は人間労働の社会的化身として、価値の尺度である。確定した金属重量としては価格の度量基準である**」と表現しています。また、マルクスは「**貨幣は使用している内に磨滅し、名目上の量ではなくなる。実質上の価値と名目上の価値が分離する。だから紙幣で代用できる。紙幣は『記号』になる。紙幣は金の記号または貨幣の記号である。（中略）紙幣は、他のすべての商品量と同様に価値量である金量を代表する限りでのみ、価値の記号である。貨幣は商品価格の一時的に客観化された反射であるから、（中略）種々の記号によって代替されることもできる。**」とも書いています。

したがって、貨幣は価値尺度としては観念的な形態にすぎないのです。

また、マルクスは貨幣について「貨幣退蔵」「支払手段」「世界貨幣」の3つの観点から説明を加えています。

「貨幣退蔵」の項では、貨幣を「**万物の神経**」として「**富の、いつでも出動できる、絶対的社会的な形態**」と規定しています。つまり、貨幣を何でも買うことのできる富の絶対的形態ととらえているのです。すなわち貨幣を保存しておけば、価値を保存することができるので「お金がいっぱいあれば何でも買える」と人々が思うようになって「お金はいくらあってもいい」という気持ちが生まれてきます。ここで、貨幣とは本来何かを買うための手段に過ぎないはずなのに、価値を保存できるという貨幣の機能にほだされて、貯めること自体を目的として貨幣を稼ぐ、「**黄金欲に目覚めた**」人々が登場します。このようにひたすらお金を使わずに貯めこんでしまうことをマルクスは「貨幣退蔵」と呼びました。なぜ「退蔵」とネガティブな語彙を選んだかというと、もっているだけではお金は一切増えないからです。「退蔵家」は単なる金持ちに過ぎず、お金を有効利用しないと後に登場する、じゃんじゃんお金を増やしている「資本家」にはなれませんよということです。

「支払手段」の項では、経済の発展とともに後払いの売買が発生し、貨幣は債務の弁済に支払われる富としての機能を獲得しましたが、それは商品流通を拡大させる一方で、支払の停滞による貨幣恐慌を引き起こす危険性があると分析しています。

最後に「世界貨幣」について。国内の貨幣は国家が強制通用力を与えるためその国では通用しますが、領域外では通用しません。ですから、貨幣は「**局地的諸形態を脱ぎ捨てて**」地金（貴金属）に戻ることで世界規模での通用力を獲得します。このような地金形態の富をマルクスは「世界貨幣」とよびました。

５．商品の命がけの飛躍

*W-G-W*という式があります。Wは商品、Gはお金を表します。すなわちこの式は商品を売ってお金を手に入れ、そしてそのお金で商品を買うというごく普通の経済活動を表しています。この式は資本主義社会のいたるところで行われるようになりました。でも当たり前にみえるこの式は本当に当たり前のことなのか。そこをマルクスは真剣に考えたわけです。

「**W-G。商品の最初の転身または販売。商品価値が商品の肉体から金の肉体へと飛び移ることは、（中略）商品の命がけの飛躍である。**」

つまり商品を売ってお金を得ることは「命がけ」、とても大変なことである、ということをマルクスは言っているわけです。たとえばある人がベビーカステラを200円で売りたいとします。でも、売れるかどうかは市場に出してみないとわからない。実際お昼時には「昼飯」としての使用価値がないから売れない。他人にとって200円と同じ使用価値がないと買ってくれないわけです。ですから、商品を「売る」ということは当たり前に見えて精神力を消耗する大変な仕事だということです。逆に「買う」のは簡単です。貨幣は一般的に（誰にとっても）平等な使用価値をもっているからです。

また、私たちが当たり前に行っている「買う」という動作と「売る」という動作も「交換過程」に過ぎない、つまり「労働」という本質によってイコールで結ばれた貨幣と商品が交換されているだけですよ、ということもマルクスは強調しています。

６．貨幣の資本への転化と資本家の登場

W-G-Wという式の解説を前項ではしました。ここで確認しておきたいのは、W-G-W-G-W-G-W…という式の中で、全ての使用価値は等しいということです。つまり、流通や商品交換の過程はなんら新たな価値を生み出さないのです。ところが、資本主義の世の中にはG-W-G’（G’=G+ΔG）という前述した定式と矛盾した式が存在しえるのです。ここにおいては、最初のGに儲け分のΔGが付加され、貨幣は増殖しています。ここからはこの式の分析がメインになります。

マルクスはG-W-G’の式の中で貨幣が動いているときの貨幣の運動を「資本の運動」と呼び、増加したΔGを「剰余価値（メーアヴェルト）」と名付けました。ここでついに「資本」という言葉が登場しました。つまり、W-G-Wという式の中で動く単に買い物をするためのお金は資本ではなく、お金から始まって商品を売買してお金を増やしていくという運動の中にあってはじめて、貨幣は資本に転化するということです。

そして資本の登場は必然的に資本家を誕生させました。資本家の誕生について、資本論はこのように書いています。

「**資本としての貨幣の流通は自己目的である。なぜなら価値増殖は絶えず更新されるこの運動の内部にしか存在しえないからである。資本の運動にはしたがって際限がない。この運動の意識的な担い手となったとき、貨幣所有者は資本家となる。（中略）抽象的な富をより多く手に入れることが彼の行為を支える唯一の動機である限り、彼は資本家として、あるいは意志と意識をもつ人格化された資本として機能する。**」

引用が長くなってしまいましたが、かいつまんでいうと資本としての貨幣は、流通し続けることによってしかその価値を増殖できないので、資本自体が自分の交換価値を増殖させることを目的として存在しているために、資本は絶え間なく増殖しながら流通しつづけるということをいっています。

そして資本の運動の「意識的な担い手」、つまり流通の過程でΔGの獲得を目指してお金を使う人々が出てきます。それが「資本家」です。また「抽象的な富」、つまり具体的な使用価値を持たないお金を増やすことが資本家の唯一の行動理念となったとき、その人は資本家になり、あるいは「人格化された資本」、すなわち人間性を失いお金を増やすためだけに行動する「モノ」として機能してしまうのです。マルクスは資本家を痛烈に批判しましたが、それは資本家全員の人格を否定したわけではなく、たとえ人格者であっても資本家になるとお金の魅力にとりつかれて資本という化け物に人格がとって代わられてしまう、と分析していたのです。

そしてマルクスは次にこう書いています。

「**したがって使用価値はけっして資本家の直接の目的として扱われるべきではない。それどころか個々の利潤ですらその目的とは言えず、目的はただひとつ、利潤の休みなき運動である。**」

つまり最初は使用価値をもった役に立つ商品を作っていても、「お金を増やしたい」という欲望が生まれてきて資本家になると、商品の使用価値なんかどうでもよくなって「儲かればなんだっていいや」という気持ちが生まれてくるってことです。結局のところ、資本家にとってはお金が永遠に増え続ければ他のことはどうだっていいということです。

７．剰余価値が生まれる謎

資本の運動の一般的定式「G-W-G」は、G-Wという購買、W-Gという販売から成り、市場経済の方式で価値が等しいものが交換されるなら、ΔGは生まれません。先ほど確認した通り、流通から剰余価値の生成を説明することは不可能です。また、貨幣の資本への転化は等価物同士が交換されるという法則に基づいて展開されなければなりません。

そこで、マルクスは剰余価値の謎についてこのように分析しています。

「**ある商品の消費から価値を引き出すためには、貨幣所持者は流通圏内部すなわち市場において、その使用価値自体が価値の源泉となるような独特の性質をもつ商品を運よく発見する必要がある。その商品は、現実にそれを消費すること自体が労働の対象化、すなわち価値創造となるような商品でなければならない。そして事実、貨幣所有者は市場でこのような特殊な商品を発見する―労働能力すなわち労働力がそれである。**」

つまり、剰余価値を生み出すためには「使うことによって価値を生み出す」商品を見つけなければならない。それが「労働力」という商品である、ということです。

例えば工場が原料を買って製品として売るとき、原料よりも出荷される製品の方が高い値段になるのは自明のことです。つまりその価値は工場を通る過程で上がります。それはなぜか。労働者が働いて原料を加工したからです。資本家が労働者を雇用して使役し、「原料」に労働者が関与して彼の労働時間の一部をその加工に費やしたことによって、「原料」は新たな価値を付加されて「製品」として出荷されていくのです。

そして、労働力が商品たりうるには二つの条件が必要となります。

一つ目は、労働力の所持者（＝労働者）が自分の労働力の自由処分権をもっていて、資本家と労働者の契約が法的に平等な立場で交わされること。

二つ目は、労働者が労働を提供する以外に生産手段を持たない、つまり労働力を売る以外に生計を立てていく術のない人であること。

資本主義社会では、この二つの条件を満たす労働者たちが自分の労働力を商品として売り、賃金を得て生活に必要なものを買って暮らしています。これを「労働の商品化」といいます。

８．剰余価値は「搾取」

前項で「労働力」は消費することで価値を生み出す特殊な商品であることを紹介しました。

ここで問題となってくるのが労働力の価値はいくらなのかということです。つまり労働力の交換価値はいくらか。

そこで「価値」の定義を再確認すると、「価値＝労働時間」です。すなわち「労働力」の価値は労働力を作り出すのに必要な時間というわけです。変な言い方ですが、言い換えれば労働者の人が一日の労働で労働力をつかいきった体を休ませ、次の日に再び同じだけの労働力をもって再び工場にくるのに必要な時間、費用が労働力の価値です。しかし労働者に家族がいれば、その家族を養っていくだけのお金ももちろん必要です。子供の養育費や住宅ローンなどがその例です。また、専門的な技術を持っている人の給料が高いのは、労働力の価値に「複雑な労働の養成費」、すなわちその技術を身につけるのにかかった教育費用も労働力の価値に含まれるからです。

したがって、労働力の交換価値は労働者が生きていくに足りる生活費と家族の扶養費、専門技術手当の総和ということができます。

しかし労働力の使用価値は常にその交換価値を上回ります。というより、そういう契約によって成り立った社会が資本主義社会なのです。例えば、労働者が日当8000円で雇われたとします。この時、労働力の交換価値は8000円で、それは労働力の再生産に十分な費用であることが社会的に認められているとします。そして彼は８時間働いて、4000円の原料を加工して20000円の製品を作り出しました。この時、彼の労働力の使用価値は16000円なのです。ここにおいて、日当分の価値を創造した最初の4時間を「必要労働」、あとの4時間を「剰余労働」と呼びます。この「剰余労働」によってつくられた価値は全て資本家の懐に入ります。つまり、資本家は8000円を労働力に投資したことによって新たに8000円の価値を創造したのです。ここにおいて、剰余労働時間を必要労働時間で割ったものを「剰余価値率」といい、労働の搾取度を表します。

したがって剰余価値とは、資本家が労働者をその交換価値以上に働かせて「搾取」することによって生まれたものだということです。しかし資本家は交換価値に則って対等な契約を結んだわけですから何も悪くないのです。この合法な「搾取」が剰余価値の正体です。

９．労働に関する分析

マルクスは「労働とは、人間が自分の行動で切り開いていく高度な物質代謝である（土肥による要約）」と述べています。そして「高度に」自然に働きかける労働力は、資本家にとってどんな使用価値も生み出すことができ、なおかつ搾取によって私腹を肥やせる理想的な商品なのです。

続いて労働過程を構成するものとして労働そのもの、労働対象、労働手段という３要素を挙げています。

労働対象には、天然に存在する「天然資源」と、そこに人間の労働が加えられている「原料」の2種類があると規定しています。

労働手段については、「**労働者が自分と労働対象の間に挿入して、労働対象に対する自分の働きかけとして役立たせるもの、またはそういうものの複合体**」という表現をしています。つまり手足にかわって労働対象に働きかける手段のことで、機械や道具に加え、タンクやパイプ、さらには土地や建物なども労働手段の一部です。

さらに労働対象と労働手段をあわせて「生産手段」、労働そのものは「生産労働」としてとらえられます。労働過程に参加した生産手段は生産活動の中で消費（減価償却）されますが、新たな使用価値をもった生産物の「形成要素」となります。（価値の、生産手段から生産物への移転が起こる）

このような労働過程は全ての社会形態に共通するものですが、これらが資本家による労働力の消費過程として行われると、資本家が労働者に日当を後払いすることと引き換えに、労働者自身が行っていた管理や指揮が資本家に取って代わられ、労働者が労働過程において生産するすべての生産物は資本家の所有物となります。マルクスの言葉を借りると、「**労働者が資本家の仕事場に足を踏み入れた瞬間から、彼の労働力の使用価値、すなわち労働力の使用たる労働は資本家に帰属する。**」という独自の現象を起こします。

また、マルクスは労働過程における価値の生成について「**資本家は貨幣を、新しい生産物の素材として、あるいは労働過程の諸因子として役立つ商品へと変容させ、死んだ対象性に生きた労働力を合体させる。それによって資本家は価値、すなわち対象化された過去の死せる労働を資本へと、すなわち増殖する価値、命を吹き込まれた怪物へと変容させる。**」と表現しています。

つまり、労働者は、過去に別の労働者が一生懸命労働して作り上げた品物（「死せる労働」が凝固したもの）に働きかけることによって（「生きた労働」）価値を増殖させているということです。

この「死せる労働」の凝固物、すなわち原料や天然資源および労働手段などの生産手段は生産過程でその価値を変えないことから「不変資本」と呼ばれます。それに対して資本のうち労働に転換される部分は生産過程でその価値を変え、それ自体の等価物プラス超過分である剰余価値を生産し、その大きさは一定でないため「可変資本」とよばれます。

このことから不変資本(constant capital)、可変資本(variable capital)、剰余価値(mehrwert)の３つを用いて、

資本総量C＝不変資本ｃ＋可変資本ｖ＋剰余価値ｍ　と表すことができます。

また、労働者が同じ時間内に労働対象に新たな価値を付け加えることと、生産手段の価値を新たな生産物に移転して維持するという２つの働きを労働者が同時に行っていることについて、マルクスは労働者が同じ時間内に2重の労働をしているのではないとします。同じ労働において具体的有用労働の側面から価値が再現され、抽象的有用労働の側面から労働時間に見合う新たな価値を作ると分析することで「二重労働」の矛盾を解決しています。

１０．労働者は搾取される

先ほどの章の復習も兼ねて資本論から一節を引用します。

「**労働日のこの部分、すなわち再生産がおこなわれる部分をわたしは必要労働時間と呼び、この時間内に支出される労働を必要労働と呼ぶ。（中略）労働過程のうち労働者が必要労働の限度を超えて働く第二の期間についても労働者に労働、すなわち労働力の支出は課されるが、しかしそこで形成されるのは彼のための価値ではない。形成されるのは無からの創造が持つ魅力をふんだんに発揮して資本家にほほえみかける剰余労働である。必要労働と剰余労働の合計、すなわち労働者が彼の補填価値及び剰余価値を生産する時間の合計が彼の労働時間の絶対量―すなわち労働日である。**」

ここで新しく登場した「労働日」という言葉ですが、マルクスの定義によると「必要労働と剰余労働の合計、労働者の労働時間の絶対的な大きさ」という意味の言葉です。しかしここで大事なのは、労働日は可変的なものである、ということです。ただし最小限と最大限は決まっています。最小限の労働時間は剰余労働時間がゼロの時の、必要生活手段を得るために自身の持つ労働力の交換価値の分だけ（＝必要労働時間の分だけ）働くときの労働時間です。（説明が冗長になりましたが、要は労働日＝必要労働時間ってことです。）逆に最大限の労働時間は、２４時間から睡眠・食事などの肉体的欲求や社会的欲求を引いた時間となります。この間で労働日が決まるのですが、「人間の姿をとった資本に過ぎない」資本家は、できるだけ剰余労働時間を延長して労働者をこき使い、より多くの剰余価値を生み出そうとします。反対に労働者はできるだけ楽にお金を稼ぎたいですから労働日を短くしようとします。ここにおいて、マルクスは労働日の決定は資本家と労働者の力関係(Gewalt)と闘争(Kampf)によって行われるとしました。

また、剰余価値の増やし方には２つあるとされています。１つめは全体の労働時間を増やす方法、２つめは全体の労働時間は変えずに必要労働時間を減らす方法です。それぞれ「絶対的剰余価値の生産」、「相対的剰余価値の生産」と呼ばれていることは記憶しておいてください。

それに加えて肝要なことは、マルクスは決して剰余労働を否定しているわけではない、ということです。剰余労働＝搾取なのだから剰余労働を０にしたら労働者は苦しまずに済むじゃないかという安易な考え方を提起したいわけではないのです。なぜかというと、剰余労働自体は新たな価値の源泉ですから、剰余労働が行われることによって今までの社会にはなかった新たな価値がどんどん生まれ、社会全体としてはどんどん豊かになっていくからです。すなわち今の豊かな文明社会は剰余労働の賜物なのです。

マルクスが問題としているのは、剰余労働＝搾取という図式です。つまり、あらたに生まれた価値が全て資本家に搾取されていることが問題で、本来は社会全体の物であるはずの剰余価値が資本家によって搾取・独占されている世の中を変革しなくてはならない、ということです。

１１．資本家VS労働者の歴史

「資本論」の出版は1867年です。（日本で大政奉還があった年です）この当時、イギリスには「追加新」工場法という法律がありました。(1850年制定）　ですが、「追加新」という呼称がついているということはそれまでに「工場法」という法律が紆余曲折を経てきたことを表しています。この工場法の変遷についてはとりあえず軽く触れるだけにしておきます。

まず産業革命後に工場資本家が誕生し、資本家による無制限な労働日の延長が行われました。そこで労働者による反抗がはじまり（チャーチスト運動など）、1833年にイギリス政府は9歳未満の児童労働を禁止し、成年労働を15時間以下、少年労働を12時間以下とし、女性、年少者の夜間労働を禁止しました。続く1844年の「追加」工場法では、少年労働の基準時間を成年女性にも適用し、児童労働をさらに短縮させました。さらに1847年の「新」工場法では年少者と女性の労働時間がさらに短縮されました。そして「資本論」の時代に現役だった「追加新」工場法は月～金は一律10.5時間、土曜は7.5時間以内と労働時間を制限しています。

しかし実際には資本家は法の抜け穴をうまく利用し労働者に対抗しました。1833年法の抜け穴を利用した少年の「リレー労働」（こま切れに交代させて食事時間・休憩時間をちょろまかし、労働時間を少しでも延長する）や、法改正により「少年のリレー労働」が禁止された後もさまざまな形での不当使役が続きました。今度は成年労働者を、10時間労働を完遂するまで工場でこま切れに使役することで、資本家は工場を10時間以上操業することに成功し、休憩時間は「資本家によって強制された怠惰の時間」に転化してしまい、休息の間男性は皆居酒屋に向かい、女性は売春を行うという事態が起こってしまいました。

そして1850年に労働者と工場主の「妥協」という形で「追加新」工場法が制定されましたが、この歴史を鑑みてマルクスは、資本家は資本の権化であり、労働者のことなどどうでもいいと考えているために、法による労働日の規制が必要になってしまうと考えたのです。このことからマルクスが資本家の考え方を表すために引用した「洪水は我亡き後に来たれ！」というポンパドゥール侯爵夫人の言葉は有名です。

１２．生産力向上のために

資本家は常に生産力を向上させようとします。その動機はもちろん、端的に言えば「儲けが増えるから」です。なぜ生産力が向上すると「儲かる」のでしょうか。

生産力が向上すると同じ労働時間でより多くの商品を作れるようになります。すなわち商品１つ１つの価値は「低下」します。このような事態がいろいろな商品で起きると、生活に必要なものがより安く手に入るようになります。すなわち、労働力の再生産に必要な費用（＝労働力の交換価値）も低下するのです。このことは必要労働時間の短縮につながり、相対的剰余価値を増加させます。

また、新たな方法の導入による急激な生産力の向上は、「特別剰余価値」を生産します。

たとえば、新たな機械の導入によって12ペンスの商品が9ペンス分の労働時間で作れるようになったとします。しかしこの商品の社会的価値は12ペンスのままなので11ペンスで売っても他社の製品より安いのでどんどん売れます。しかし値下げしたにもかかわらず元々の剰余価値に加えて2ペンスの「特別剰余価値」が売れた分だけ資本家の懐に入っていくのです。このぼろ儲けの状態は他社に追いつかれるまで続きます。

では生産力を向上するための方策は他にあるか。

マルクスが挙げているのは「協業」です。協業について「**同じ生産過程で、あるいは同じではないが関連のあるいくつかの生産過程で、多くの者が計画的に一緒に協力して労働するという、労働の形態を協業という」**とマルクスは解説しています。なぜ協業が生産力をアップさせるのかについてマルクスは６つ、理由を挙げています。

1. 労働者の個人的差異が相殺されて労働の質が均質化する
2. 生産手段の共同使用による工場等の集約とそれにともなう商品価値の低下
3. 集団力としての生産力の創造
4. 労働者間の競争の発生
5. リレー作業や同時作業が可能
6. 結合労働（協力して行う労働）による個人労働では実現不可能な能力の発揮

そして協業するうちに作業過程は分割され、教育なしで誰でもできるような労働に分割されていきます。

またマルクスは「協業」の発展形態として「分業」を挙げています。

その「分業」の例が、協業の流れから各過程が分化した、流れ作業的な「有機的マニュファクチュア」と、その逆に自立的な異種手工業が新たに結合・協力し商品をつくる「異種的マニュファクチュア」です。

１３．機械の導入

資本論第13章「機械装置と大工業」は資本論の中でもっとも長い章となっています。この章では機械と工場の経済における役割を論じます。

マルクスは最初に、資本家が機械を導入する動機は相対的剰余価値の増大にあると規定します。しかし資本家の投入できる機械の量は限られています。「資本論」から引用すると、「**資本にとっては、機械の使用の限度はさらに狭いものとして現れてくる。資本は投じられた労働に対してではなく、投じられた労働力に対して支払いを行う。それゆえ資本にとっては機械の価値と機械によって代行される労働力の価値の差こそが、機械を使用する限度を決める。**」すなわち、機械によって代替される労働者に支払うはずだった賃金より機械の価値の方が安い場合にのみ機械が導入されるのです。この限りにおいて機械を導入すれば生産力は向上して商品の価値は低下し、前節でも説明したように相対的剰余価値が増大して資本家の懐はさらに潤います。

ここで重要なことは、機械と労働力の価値生成のありかたは違うということです。

つまり、機械の購入には巨大な費用がかかりますが、その価値は、人間の労働のように全て商品にかかるのではなく少しずつかかります。つまり、機械が一個の商品を作るたびに消耗する（買い替え時期に近づく）平均的な消耗分の価値が商品に転化されるのです。さらに例をあげて説明すると、100万円する、100万個パンを作ると壊れてしまう機械があるとしたら、機械が一つのパンに与える価値は、もちろん100万円ではなく1円であるということです。このことは「資本論」に「**機械は労働過程に常に全面的に入り込むが、価値増殖過程においては常に部分的にのみ入り込む**」と書かれています。

まあここまではよく考えれば当たり前のことです。

次に機械導入が労働者に及ぼす第一次的影響についてマルクスは分析します。

「**機械類は筋肉の力を不要なものにする。そのかぎりで機械は、筋力なき労働者あるいは肉体的に未成熟であっても四肢の柔軟性に富む労働者を使用するための手段となる。だからこそ婦人労働と児童労働は、機械類の資本制的使用が発した最初の言葉となったのである。労働及び労働者のこの力強い代用物は、たちまち、労働者家族の全メンバーを性と年齢に関係なく資本の直接の命令の下に編入し、それによって賃金労働者の数を増加させる一つの手段と化した。**」

やや引用が長くなってしまいました。

要するに、機械によって労働者に筋力は求められなくなり、家長である男性に加えて児童・婦人が資本家のもとで働かされるようになった。そしてその結果、

「**労働力の価値は、個々の成人労働者が生きていくために必要な労働時間によってだけではなく、労働者家族が生きていくために必要な労働時間によっても規定されていた。機械類は労働者家族の全メンバーを労働市場に投げ入れることによって、成年男子の労働力の価値を、彼の家族全員に分与する。それゆえ機械は彼の労働力の価値を切り下げるのである。**」

前にも触れましたが、労働力の価値というのはその労働者を再生産するための費用です。

大人の男性１人を雇っている場合には、その人の労働力の価値というのはその人が生きていくのに必要な費用だけではありません。妻や子供の生活費、子供の養育費、それらをひっくるめた総費用が彼の労働力の価値です。

しかし家族全員が働くようになると、家族一人一人が生活していくためのお金は別々に支払われるようになり、男性に妻や子供の養育費を支払う必要はなくなります。

たとえば妻と三人の子供をやしなっている男性がいたとします。機械が導入されるまでは男性には50万円の収入が資本家から支払われていました。しかし機械導入後には妻も子供も働くようになり、夫40万、妻30万、子供10万ずつの収入となりました。家族全体では40＋30＋10＋10＋10＝100（万円）で倍の収入となっていますが、一人あたりの労働力の価値は20万円になっています。機械導入下では、子供も女性も筋骨逞しい男性も同じ労働をするわけですから、資本家は労働力の価値を30万円/人も切り下げることができました。労働力の価値の低下は相対的剰余価値の増大をもたらすことは前にもやりました。

そして母親が労働に徴用されることによって、家事労働は商品によって代替されます。

たとえば、肉豆腐を「うちのごはん」シリーズを使って作れば200円くらいでできますが、お惣菜で買うと298円します。食事の他にも掃除・洗濯を商品に頼るようになります。この結果生きていくための支出は増大し、家族全体としては上昇した収入は帳消しになってしまう、とマルクスは主張しています。

マルクスの分析は続きます。

「**機械は労働生産性を高めるための、すなわち一商品の生産に要する労働時間を短縮するためのもっとも強力な手段である。したがって資本の担い手と化した機械類は、まずは機械化の波に直接さらされていた産業において、労働日をあらゆる自然的限界を超えて延長するためのもっとも強力な手段となる。**」

人間には働くことのできる時間に自然的限界がありますが、機械にはもちろんありません。資本家はできるだけたくさんのモノを生産したいと思っていますし、時間が経つとより生産性の高い機械が登場してきてしまいますから、早く使い切ってしまうために、機械を必然的に24時間稼働するようになります。従って労働者は、24時間休みなく動く機械と一緒に交代制で働かされるようになり夜勤が増え、労働時間は増えてしまいます。

まだ機械を導入するメリットがあります。復習の部分も含め長めに引用します。

「**資本の手中にある機械類は、際限のない労働日の延長を生み出す。そしてそれが、すでに見てきたように、やがて生活の根拠を脅かされた社会からの反動を引き起こし、それとともに法律によって制限された標準労働日をもたらす。そしてこの標準労働日の基盤の上で、われわれが以前に遭遇した一つの現象が決定的に重要なものになっていく―すなわち労働の高密度化である。絶対的剰余価値の分析においては、とりあえず労働の延長的な長さが問題とされ、労働の密度については与えられたものとして前提されていた。われわれは今や、延長的な長さが密度ないし強度へ転換する過程を観察する必要がある。**」

機械の導入によって人間の限界を超えた労働日の延長が起きると、先ほど触れたように資本家と労働者の間で衝突が起こります。そして「工場法」のような労働時間を制限する法律ができてきます。これ以上働かせてはダメだという上限ができます。じゃあその短い限られた時間の中で徹底的に働かせればいい。これがつまり「労働の高密度化（労働の強化）」です。池上さんがこのことを説明するために挙げている例を紹介すると、自動車を生産する際、ベルトコンベヤーの導入前は労働者が車の周りを動き回り、あれこれ考え事をしながら自分のペースで組み立て・部品取り付けを進めていたが、ベルトコンベヤーが導入されると部品を取り付けなければならない自動車が次から次へとやってくるので、物事をあれこれ考える暇も持ち場を離れる暇もなくなってひたすら働かなければならなくなる。これが労働の高密度化の例です。

このことはスライド第４回６枚目の「筋肉の多面的な働きを抑圧し、一切の自由な肉体的・精神的活動を奪い去る。」という文言とリンクしています。